

伊勢叅宮名所圖會

四

和書門			
類	號	函	架
二九一二七	一〇四	四	八

内閣文庫			
和書	類	冊	函
二九一二七	一〇四	四	八

内閣文庫	
番號	和 29127
冊數	8 (4)
函號	172 319



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

伊勢参宮名所



録

御牧小畑

提以古

清野井庭社

山田

離宮院舊蹟

豊川

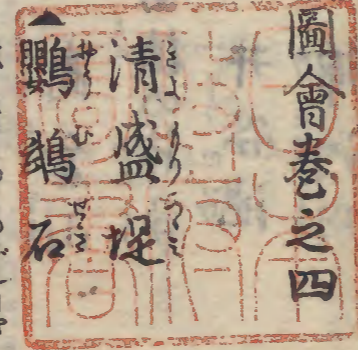
北御門社

子良館

御酒殿

辰園山社

圖會卷之四



清盛堤

鵬鶴石

大間國生社

中島

厭離山飲淨寺

月讀宮

御勢棚

國見社

忌火屋殿

御調倉

度會國見社

内一〇二〇七號

御川祭

土貢島

大間廣

之留山威勝寺

正法寺

高川原社

北御門橋

狹宜宿鉾

本柴垣

御番倉

御廩

辰波里

中川原

草薙社

下縁寺長寺乃
同縁三節乳港墓

三寶寺

館所

丸柿

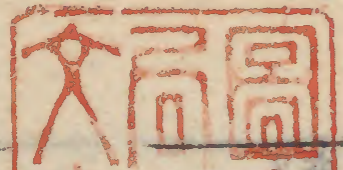
北鳥居

廳舎

上御井社

清盛楠

教部
文庫



一鳥居

直會院 玉串所
同り林

手水場 中地

五百枝松

齋王候殿

度會宮心殿 相殿
三座

沖饌殿

神庫

別宮遙拜所

修壯冊 二宮の
修壯冊

三鳥居

玉串沖門 番酒沖門
瑞恒沖門

西宝殿

に十束社

内宮遙拜所

下沖井社

高倉山

沖田植の沖

井谷池

神河内

苗の社

三石

沖母神拜所

養三沖門

神嘗祭 創祭儀

幣帛殿

高宮

宮 日炊殿
地漢宮

風宮 炊殿
日新
中官

岩戸 高天原

日文庫 屋上儀

振森

沖田

二鳥居

沖池

僧尼拜所

石壺

裏沖門

下部坂 波指石
金石

月讀宮遙拜所 日内

高神社

度會大國玉比賣神社

豐宮壽

豊宮壽

丹谷山

山末

瀧浪山 白子園

河邊里

隱山 隱池

光明寺

徑ヶ峯

貝吹山

月讀寺 特諾宮地

月讀森

牛谷の浦田

西谷神照寺 紙鬼谷
美津寺

敷ヶ岳

橋姫江

麻留山 田上太神社

園布里

妙見町 隱ヶ岳

尾上山

光明寺 後白河洗碑
後白河洗碑

間の山

中地苑

善提山

月讀森 特諾宮地

中之切

法樂舎

蓮臺寺

宇治橋

宮傍氏社

継橋

園壽宮

常明寺

古市

葛籠石

長滝羅石

興玉森 様か淵

慶光院 修勢上人

不動堂

長明寺

五十鈴川 沖葉河

鏡石

世義寺 糸さうじ

小田橋

尾部社

青雲院 阿加井
眠地
石取
目

大五輪

王孫池

皇女森

楠部村 大玉神社
園津神社

園田 那自賣祀

津長社 大水江

林傍文庫

鏡石



宮川東岸
豊宮川

風雅集

君が代の

宮川乃

舟

舟

か

後京極

所名

宮川 山田の入口に是より一名度會川 豊宮川 母宮川

其原已分淵也其外谷より瀉て二見大湊よる

内一〇二〇七號

滋賀縣 瀬川郡 瀬川

小幡野 西宮川東川にけり一帯の川はあまきり

源一取を登後谷のす瀧水の所も支宮のちちより人を物一載人き瀉と

新抄 新抄 ありてより宮川のゆがづ 永代までしかけ多頼さん 定家

新抄 ありてより宮川のゆがづ 永代までしかけ多頼さん 朝勝

清盛提

宮川の堤をいつていふ川瀬慶一をかんてんせんと

大内洪水せりり記録よりより崇徳院大治三多勅して大宮三座

大河内神社志登英神社を河水の守護と祀せ給ふけ河平清盛令を

多りて此堤を築つと 又私治三多勅未だく洪水ありて

御川祭

毎月三月三日是と 法座本記又渡相河原より忍徳海人より人

奉一魚をとりて神饌と蓄ふとあり今も其末の持守氏の人此を

其記云

一三しの神の孫揃ハるの神をわしとてあまのこあをりけりきりていさく中野
たぐるまのうしろの櫛うちとてあまのこらひろのそとひさのこをいさく
あけてうしろのこをいさくあまのこらひろのそとひさのこをいさく
坂土佛系備記より宮川并橋谷よりゆくと小俣田より里のゆとる玉成をけり
川よりまはば持守氏の人取を瀉し離宮跡のまはば持守氏より
被掃すと天忍海人令の事してそのうと入月のそとひさのこをいさく
例として下事

所名

藤波里

或記云 是より宮川より地村の山は波地の流るると藤あり其末の西の方宮川の向

藤波家の屋敷あり其末の西の方宮川の向

幾代を松よりけりて藤波の里よりまをを経ぬん 長良

御牧小野

或記曰 此處を藤波と名する者もよる

宮川の上の瀬谷中村 岩出里 宮川の上の瀬谷中村

鷲石

宮川の上の瀬谷中村 岩出里 宮川の上の瀬谷中村

もあはし西の大板谷野尻河川より流るる東の河川に瀉るる

所名

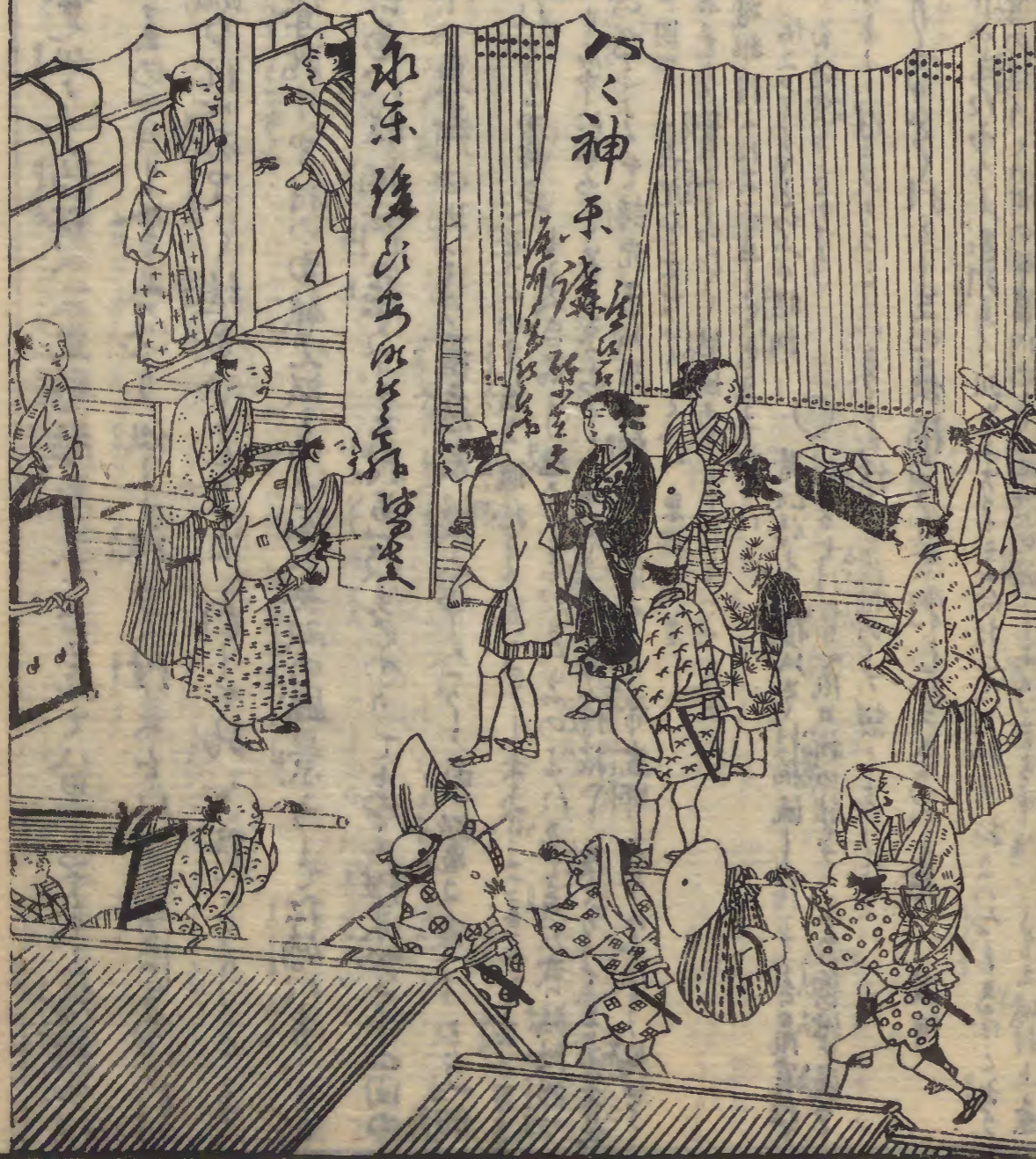
中川原

諸國の系清人
を町師より
人を此
運入
其河師
の名溝
の名
組の



暇を以て
書し
此石の表
毎人拾牌
を如く
の作筆
の

八く神
平儀
水原
の
名



春分此より約野へ三里勢野石をもちて八里とてふるも治難石に

して表の一日も善く及ぶ但し船に付て往來せし其旁は二つに

急流なれば去く絶えしんじ別して釣ヶ野より上り

巖後舟中中村の南麓見坂とてふ双の勝景うて松崎にありと

し其南に地柄阿蘇とて村邑較多ありてたは往來せし回の

市中へ魚舟の出るも至疾不絶に中へり魚船置又さうど入田

路われとも思ふ石山の末後へ橋掛り其のさ十余戸ありてその名

の音よしも中か抱く善く善く善く善く此舟も舟傳津や廣くちりて

義御の歌ふより詩記も久流の歌後へ入時霊元帝畫師へ中宗化り

屏風に國せし其祀を去付りしとて東涯隨筆

○漢名を御書石にけり彼國よりてつそバクとて

道は破郡村より石ありて其名をいふかた

中川原 官邸の跡ありし家跡より此舟も方々白村の内を知者持より

土貢

昔は竹より柏葉の竹流りの味なりしとて風俗

中川原 官邸の跡ありし家跡より此舟も方々白村の内を知者持より

村の邊へ海村の邊へを城て新田村よりけり右の地

堤 中川原の世古とい他たれし小路裏町といふと

○中川原中橋昔は宮川の川中なり

○非都まで撰る中河を世古といふと下馬の橋より

老母へ懐きありては事々其表名も日本最古の世古

翁が後活き又ノニヤガラ文又ハ康親が率徒婆の歌

○今下馬所町といふは治世

大間圃生社 大間の圃生社 大間の大圃生の命圃生

草葎社 大間の圃生の圃生ありし時密仁天皇の行代大

大間廣 大間の圃生の圃生ありし時密仁天皇の行代大

大間圃生社 大間の圃生の圃生ありし時密仁天皇の行代大

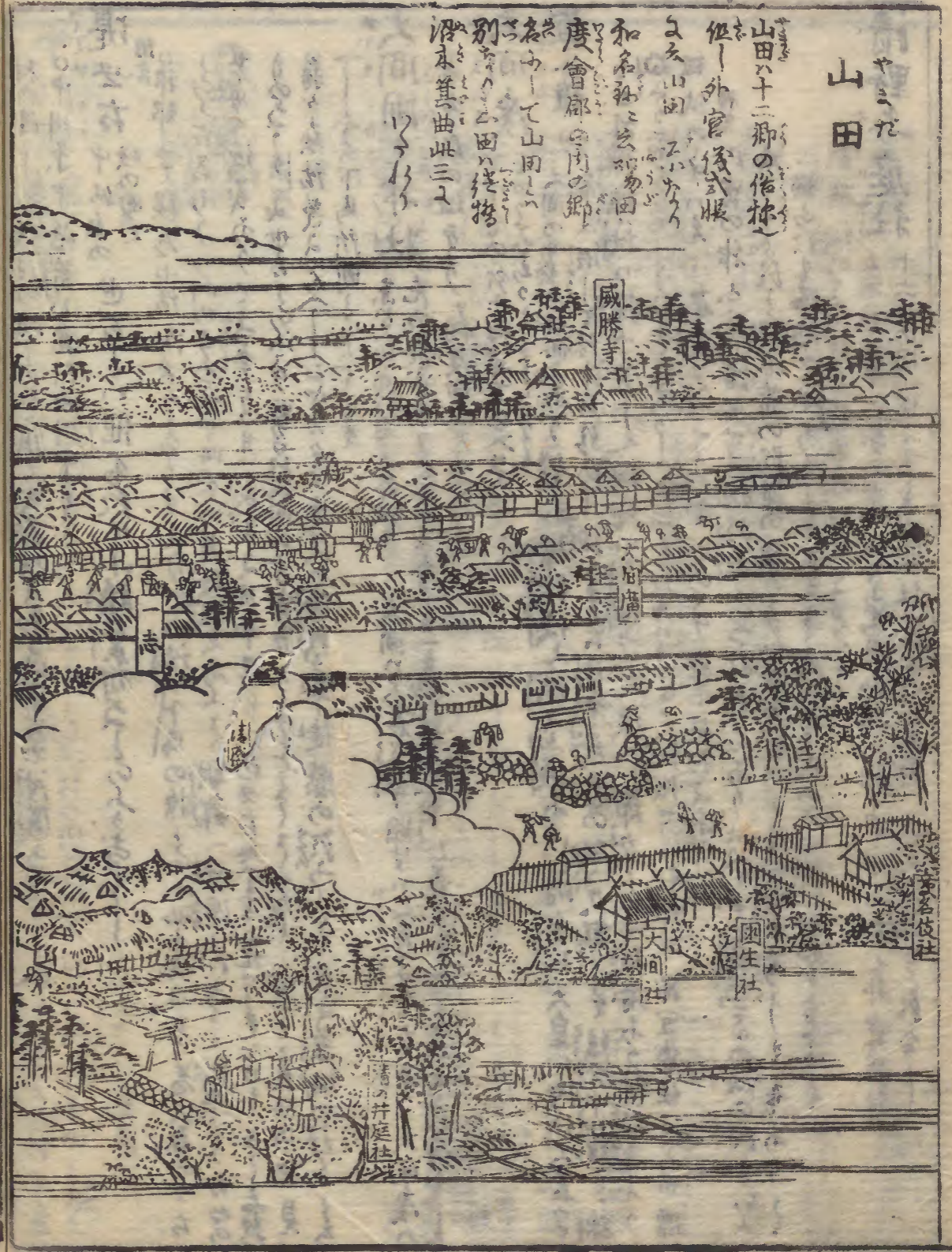
大間圃生社 大間の圃生の圃生ありし時密仁天皇の行代大

清野舟庭社 大間圃生の圃生ありし時密仁天皇の行代大

十六社の内 後名を小圃の社といふと

山田

山田の十二御の借株
但し外官後式帳
又云山田 五ノカ
和名 和名 和名
度會郡の内之郷
名 山田
別 山田
沿 本 曲 此 三



中... 延喜... 入田... 威勝寺... 真言宗... 不勤明王... 花...
中... 延喜... 入田... 威勝寺... 真言宗... 不勤明王... 花...
威勝寺... 真言宗... 不勤明王... 花...
真言宗... 不勤明王... 花...
不勤明王... 花...
花...

○下総守長秀同孫三郎頼澄... 北畠中納言... 頼澄...
○下総守長秀同孫三郎頼澄... 北畠中納言... 頼澄...
北畠中納言... 頼澄...
頼澄...
...

○三門外... 長秀... 三郎... 頼澄...
○三門外... 長秀... 三郎... 頼澄...
長秀... 三郎... 頼澄...
...

○下馬橋... 若公卿... 頼澄...
○下馬橋... 若公卿... 頼澄...
若公卿... 頼澄...
...

○離宮院... 坐中臣氏社四座... 藤原...
○離宮院... 坐中臣氏社四座... 藤原...
坐中臣氏社四座... 藤原...
...

○月讀宮... 不祭月夜見命... 天照...
○月讀宮... 不祭月夜見命... 天照...
不祭月夜見命... 天照...
...

○高河原社... 十二社... 藤原...
○高河原社... 十二社... 藤原...
十二社... 藤原...
...

○館岡... 上中下あり... 藤原...
○館岡... 上中下あり... 藤原...
上中下あり... 藤原...
...

所名

三宝寺

山田の中... 十奇... 不動明王... 寺号...
山田の中... 十奇... 不動明王... 寺号...
十奇... 不動明王... 寺号...
...

離宮院

官人... 檢校... 藤原...
官人... 檢校... 藤原...
檢校... 藤原...
...

月讀宮

官後... 不祭... 月夜見命... 天照...
官後... 不祭... 月夜見命... 天照...
不祭... 月夜見命... 天照...
...

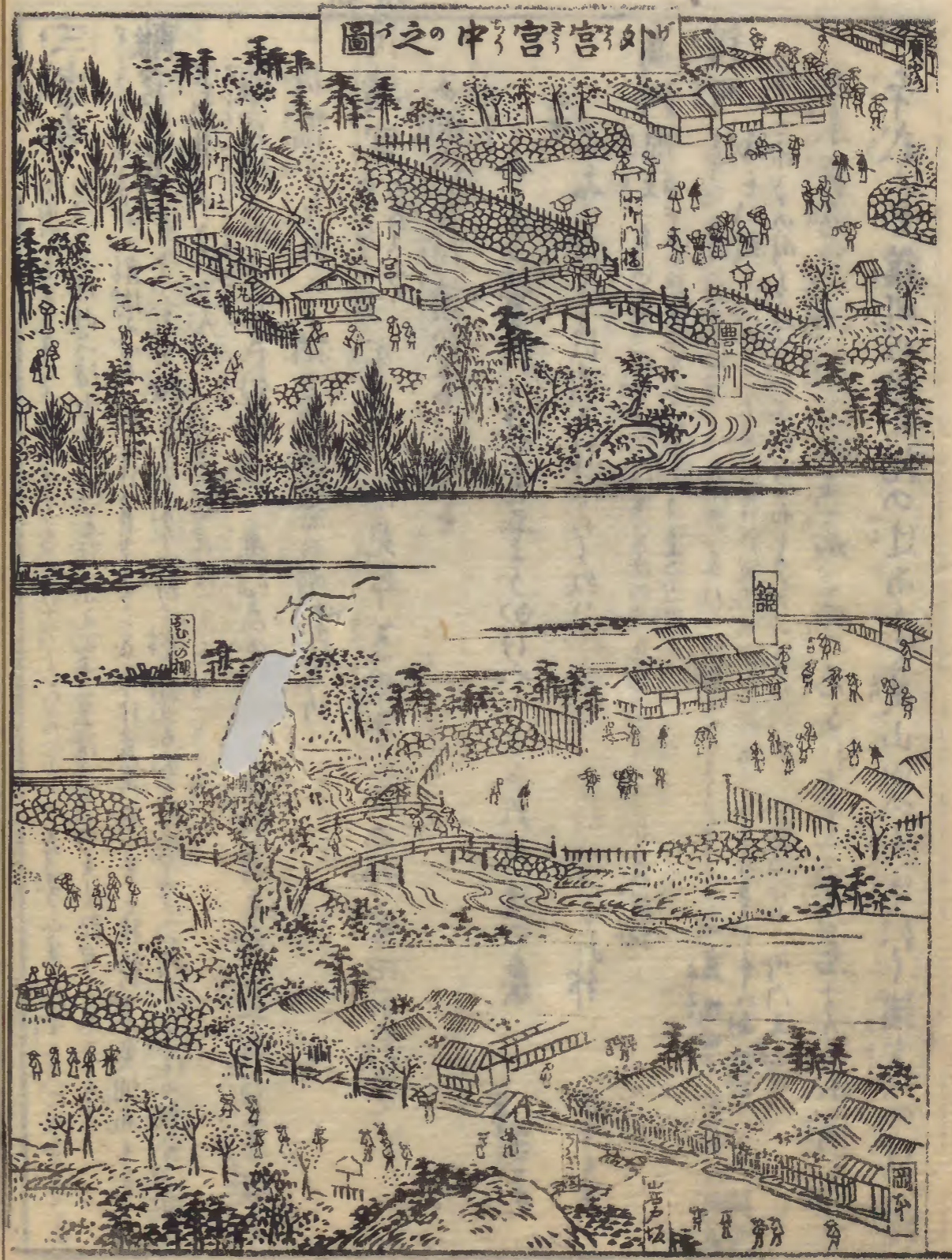
高河原社

十二社... 藤原...
十二社... 藤原...
藤原...
...

館岡

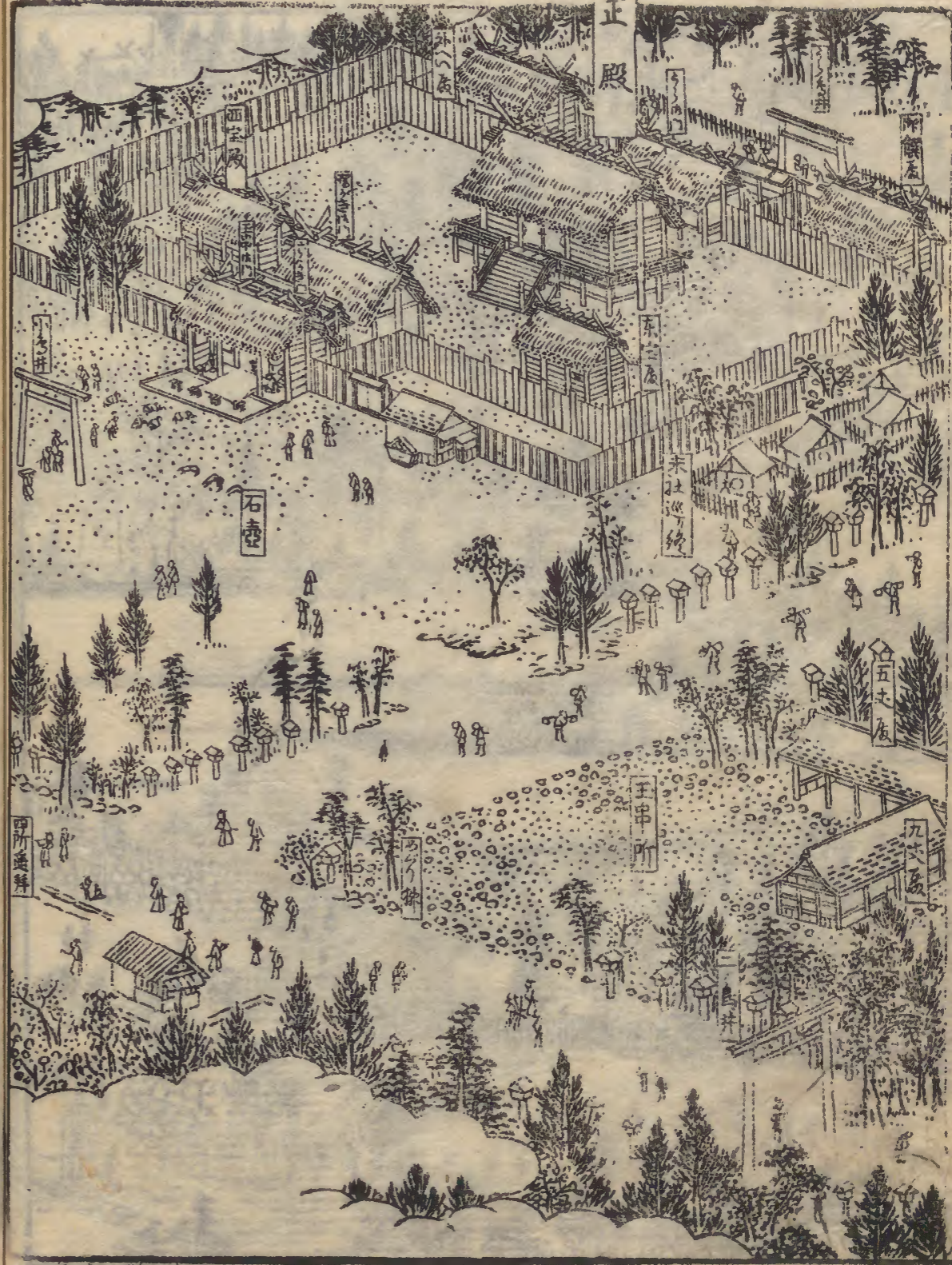
上中下あり... 藤原...
上中下あり... 藤原...
藤原...
...

○本式... 館岡の内... 山田... 諸方...
○本式... 館岡の内... 山田... 諸方...
館岡の内... 山田... 諸方...
...



其二

あま
天子の御参宮ハ
持統帝聖武
帝後白川帝
室町屋新参宮ハ
旧尼よ妻一、信長公
も所末宮のりふい





其二

高倉山

高佐山
日笠の山
加利徳山
左賣山
鷲不登山
音金山
郭公多山
多入名山

の御饗たりしに子ハ九カよりなりて月経通る所候浪りて其間宮出で候
御饗をさうえとて諸の内宮の御饗も外宮にて調人宮路へさしむる候様とありし
忌火屋敷 子良被のありあり

物々の御供を炊き禊火してこれを調進と侍れ忌火屋敷と一殿をかて
西の間を炊屋敷と云ふ東の間を御白屋敷と云ふ侍りて御供の餅を搥りあり

毛も今の餅よりやく皮をさるる粉をかきおろしあり侍りて御供の餅を搥りあり
の御供の餅よりやく皮をさるる粉をかきおろしあり侍りて御供の餅を搥りあり

本を以て御供を求るなり其形古朴ありて布衣の具あり
本柴垣 忌火屋敷のありあり侍りて御供を搥りあり侍りて御供の餅を搥りあり

廳舎 子良被 御供物忌火を以て集り 諸神の御供物ありて廳へ改不
よりして改事を執りおろしあり侍りて御供を搥りあり侍りて御供の餅を搥りあり

御酒殿 子良と廳舎 御酒殿納め候殿と此下に豊宇賀能賣神と祀り
御酒殿 子良と廳舎 御酒殿納め候殿と此下に豊宇賀能賣神と祀り

此神の倉稻意神と同神ありて六六宣讀比賣とも亦保食の神と
也 酒を上げて御供あり侍りて御供を搥りあり侍りて御供の餅を搥りあり

味酒の三輪の花うらみては秋の紅葉のうらみ候りも 長を王
今九 天地と久きききては秋の紅葉のうらみ候りも 長を王

御調倉 廳舎の 是の御政印を納めあり侍りて御供を搥りあり侍りて御供の餅を搥りあり

御器倉 御調倉の南にあり 調進と御膳の去器其外御中あり侍りて御供を搥りあり侍りて御供の餅を搥りあり

御器倉 御調倉の南にあり 調進と御膳の去器其外御中あり侍りて御供を搥りあり侍りて御供の餅を搥りあり

御器倉 御調倉の南にあり 調進と御膳の去器其外御中あり侍りて御供を搥りあり侍りて御供の餅を搥りあり

御器倉 御調倉の南にあり 調進と御膳の去器其外御中あり侍りて御供を搥りあり侍りて御供の餅を搥りあり

出器も若干あり

所名

上河神社 河原を流る百廿六西 此河舟天長舟とも天長名舟とも恐徳舟ともおも

舟とも云水の上は社ありて其水を引て水汲む 天長天 大社宮の御供に用

る舟後若より其例たがま又炊洗に忌火屋敷の水と引由雲水を汲む

舟素より百廿六の間の無言にして高貴の人と違ふ 舟 辨讓せざる例あり

果る首天村雲命 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮

不滅の水と日白く 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮

園とに輪 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮

若くは濁もあり 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮

若くを磨て汲とも 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮 天村雲命の御宮

所名

後園山 河舟の社 後園山の社 後園山の社 後園山の社 後園山の社 後園山の社

花咲けい美名舟の水と 後園山の社 後園山の社 後園山の社 後園山の社

○後社 石積の社 石積の社 石積の社 石積の社 石積の社 石積の社

園見社旧地 園見社の地 園見社の地 園見社の地 園見社の地 園見社の地 園見社の地

御所 本堂垣の舟 本堂垣の舟 本堂垣の舟 本堂垣の舟 本堂垣の舟 本堂垣の舟

馬二疋と載り 馬二疋と載り 馬二疋と載り 馬二疋と載り 馬二疋と載り 馬二疋と載り 馬二疋と載り

○版記道 版記道の地 版記道の地 版記道の地 版記道の地 版記道の地 版記道の地

▲是より宮中勅使上役の御道 是より宮中勅使上役の御道 是より宮中勅使上役の御道 是より宮中勅使上役の御道 是より宮中勅使上役の御道

清成血捕 清成血捕 清成血捕 清成血捕 清成血捕 清成血捕 清成血捕

一鳥居 鳥居 鳥居 鳥居 鳥居 鳥居 鳥居 鳥居 鳥居

乞より 乞より 乞より 乞より 乞より 乞より 乞より 乞より 乞より

下系せられ 下系せられ 下系せられ 下系せられ 下系せられ 下系せられ 下系せられ 下系せられ 下系せられ

け強を制れ け強を制れ け強を制れ け強を制れ け強を制れ け強を制れ け強を制れ け強を制れ け強を制れ

より禁ど より禁ど より禁ど より禁ど より禁ど より禁ど より禁ど より禁ど より禁ど

清盛捕

昔小松内大臣を盛
勅使として素向の
西へ送りしを
代を里信を
りて清盛捕と
つてあるべし
勅使として清盛を
三度重宝云々の
素向ありし由ハ
勅使邪に例え

又



神庫一のち右と二のち右 右典記録を納む寛文年中の沖辻宮のち再

真と昔は是れ源を文殿として講習授勅の御建屋よりを火災を蒙りて今の宿禰

苗の社赤の西氏建 二のち右赤丸りへ入不あり穴ありて赤丸名の二

二鳥居一のち右の 勅使の時此不なく大藤津塩城一拂の披ふ本綿を

結び登りて振をらひ又堅塩を去置り盛て拂のまよのせく振漂

て清めまろく満國の赤宮人は沖師の赤く清めの御法

直會院五丈殿二丈殿九丈殿一丈の三殿を一つにして赤宮院と云ふ 又五丈殿一丈と

公より再興一 是の勅使御食庭の不也公の御根元よりありて赤宮院と云ふ

をこいふかろう日本紀於統天皇の紀に掌の室はあうらんと訓一御管御食庭を

會まらうらうの沖の御酒まつりあり春日社あり赤宮院ありて勅使御食庭を

つゞき孫ふちり其後解然の沖も赤宮院と云ふ赤宮院に 今も赤宮院あり

解後庭ふも引いて附よりて其名のりひありあやも赤宮院

此一殿も老給て御食庭ありたり沖興宿と云ふ其西は区か今の給たり

○玉串所九丈殿の赤宮院の首の石壺ありて御食庭あり 雨天に沖興宿に

給りを今一の殿にておとる是の月次赤宮院と赤宮院

玉串を右給る玉串給りあり○廻拂此不ふか 其拂の如く

宮司玉串を右拂の東廻り赤宮院の玉串を取く拂の西を廻る

に廻拂とて解後の時宮司赤宮院の冠はけは本綿づつを此拂は

かろり此不其場不廣きゆ人丈庭と云ふ

別宮遙拜所廻り拂の傍沖池 別宮に所あり 高宮云宮月凌宮 風宮

石壺あり 赤宮院 赤宮院の石壺あり

三石沖池の 石壺の如く三ツ居並赤宮の御是を避く不踏をおひと

是月次赤宮院とて赤宮の御は赤宮内人沖御を修とる

沖池沖池の 上中下の沖池あり上の沖池と中の沖池と下の沖池

二のち右の外之室あり中の沖池と三池とも云ふ又沖川池とも云ふ

式沖川池の神ありとて沖池あり

赤宮院三ツ日向赤宮院監外宮とて赤宮院あり

赤宮院とて赤宮院あり

赤宮院とて赤宮院あり

神嘗祭

在例幣使

天子より西宮勅使
とて清心寺に
今九月十日十日
は、年毎のつとめ
先づ北の宮に
るは、藤原の御所
始、土御門の御所
一とありて、神祇
官（さか）にありてお
こまひのつとめ
養老六年
九月十一日
とありて、



其二

勅使進發のちの宣命とくちして作紙伯禁
 庭の事勢近日のちを宣命の目にあつて宣命と
 湯と常なる長月の村掌の御幣を御中
 依りて奉ると勅をなつてを返の園と越
 不の御宮川と流す種々の御物越へのも
 居り下馬の御所を御馬と引まて御
 不れおしてのちありまり度なること
 をのち候はつと中宣命と續進し
 宮司又は御所のちかみ申と
 納り候のち御所内よ
 ちこそ御幣を納め
 ち御所内とてのち
 八段御食膳候森の
 仍いると委くは延
 名式を候式帳を
 ちあると其大振と記
 と又委のち候
 名式といふあり候
 ひろくの御所と



磐垣河門磐垣河門の内より磐垣河門磐垣河門の内より磐垣河門磐垣河門の内より

度會宮正殿 豐受皇太神 一座

相殿 天彦々火瓊々杵尊 天彦玉命 天兒屋根命 三座

法後拾遺

かけまきもか〜これ等の宮柱をねんもをのちん

後千載

々皇のらまんも杵やのみとのうはてをねんもをのちん

み八百載

そのうもやね〜はをまのまじしを君が意〜

下

拂はを宮人の神あまのいまま神のま〜

系清紀

行ののちり〜まのいさ〜ねもあ〜小間〜

ま本

神風やのの柏も杖のまを宮人の神人ぞてた

神代百首

天〜はをまの神の宮人の火と〜に〜

神代百首

神のま山田の〜は河後連繩〜

後千載

君ううはら田の〜まの〜

新編

若う世に〜ら〜ら〜

○當宮河法座の始り人皇廿二代雄略天皇廿二年九月十六日

天皇河宇廿六年十月は天照皇者神當國平鈴川上鎮座

後百八十二年を経て天照皇者神の神託宣し〜

謝郡美名原より移す〜

其昔倭姫命王孫を〜

皇孫そのま〜

○皇孫そのま〜

御殿造りは南面より萱葺堀立柱ハ大石定礎屋敷の礎石
敷石をえへ竹本込其ま縄かけにせしむ之 ○風博鑑本

泥陵板 覆板 植株標 植貫 鞆掛 居玉 大床 階
金洞の御饒等其外記よりいへば

東宝殿 西宝殿 西宝殿ハ東宝殿ハ御幣帛綾御調の
納西宝殿ハ御神馬の調度等納御幣也
幣帛殿 御幣屋ともいふ殿の軒の方より

裏御門 左四祀より右の御門先記せり 熱て御門より何よりを石窓神櫛石
窓神二神を祭るを御門神と云 延喜式櫛石窓神四面門各一座と云一各を窓神戸別神

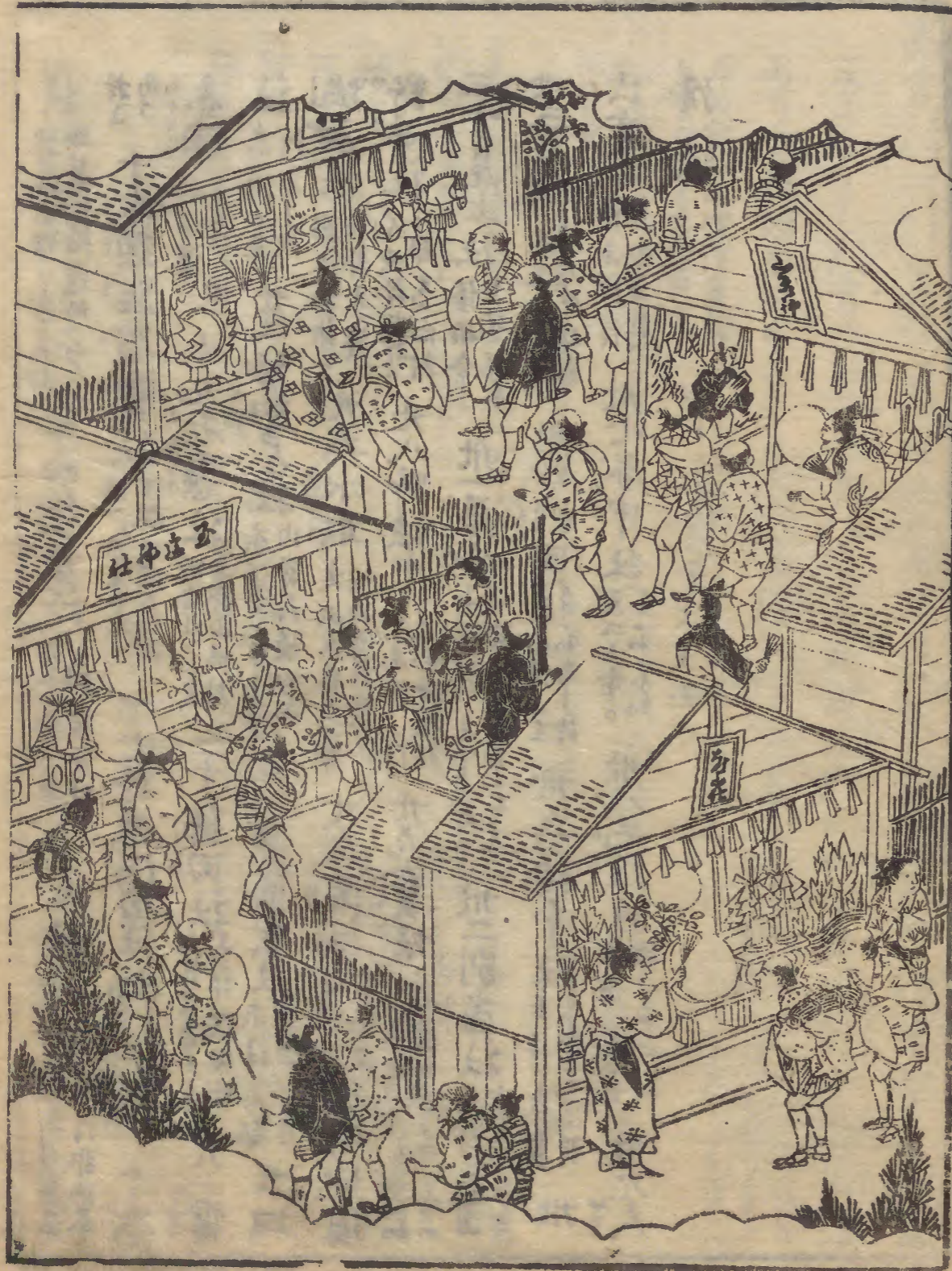
御饗殿 正殿の良方内の 是ハ二不吉神意知々の御饗を備ふる御敷方
御饗殿ハ正殿の外より 是ハ二不吉神意知々の御饗を備ふる御敷方
御饗殿ハ正殿の外より 是ハ二不吉神意知々の御饗を備ふる御敷方
御饗殿ハ正殿の外より 是ハ二不吉神意知々の御饗を備ふる御敷方

去年初月合款膳考

八月廿三日の御事を記して君に傳ふに於ての御事

四十束社 内宮のたりと云 後ハ外宮に十束社内宮ハ八十束社と云 同記
いささの御比より云々 外宮儀式帳ハ内宮の御事二百余条と云 後ハ
いささの御比より云々 外宮儀式帳ハ内宮の御事二百余条と云 後ハ
いささの御比より云々 外宮儀式帳ハ内宮の御事二百余条と云 後ハ

- 一字領の野社 宇加麻賣命宇加麻
- 二草奈波社 標御仗。日
- 三大同
- 四回上大水社 小多雲宮子
- 五高河原社 日郡月漢宮北
- 六河原別社 日郡大
- 七高河原社 日郡月漢宮北
- 八
- 九小候社 日郡湯田小候村
- 十御郷食社 日郡
- 十一宮儀氏社 日郡宮儀
- 十二御藏社 日郡
- 十三御田



まじら 末社順拜

首ハ勢カスガ瓦那
 度會郡又と御
 座と持社末社と
 巻ハ明世
 扱ハれとも好
 用扱を田よの旁と
 其遠拜不と
 金々



社 井名未詳。香去那 十四根倉社 保食神。多 十五依奈社 除志居宿子
 村。 十六須麻留賣社 日郡大垣外村。 十七野依河田社 未詳。野依 十八
 赤傍社 未詳。 十九打懸社 垣安外。 二十櫛田社 大養。 廿一雷
 社 未詳。 廿二修加戸社 未詳。 廿三箕曲氏社 未詳。 廿四
 塩屋社 日郡大津。 廿五水取社 水戸。 廿六園社 未詳。 廿七宇須
 野女社 日郡多向村。 廿八野依中社 未詳。 廿九寶塔社 未詳。 三十尾上社 未詳。 卅一
 卅三大水社 未詳。 卅四河田社 未詳。 卅五槐本社 未詳。 卅六
 卅七高白社 未詳。 卅七安中社 未詳。 卅八毛理社 未詳。 卅九太
 湊社 手屋。 四十志賣社 未詳。

所名

高宮 大宮の末末 一燈 修成戸主神 豊受大神の荒蕪之外宮身一の別宮
 ありて増垣玉垣もろしうと今に於て増垣一寺と
 下郡坂 神鏡廣博記云 於檜尾織部坂とあり坂又檜尾とも云
 其の宮へある河池の東北石橋を渡り風の宮との間を地え境
 神より石神引石といひて人の踏ざる石あり或ハ二ツとも三ツとも
 修補せし時此拜殿の後よりツの青石所得より長廿二尺 許幅八九寸 重と

常ニ倍せり小石成りておてハ令の青ありこれハ小石ノ貞命長官神

庫ニ納む 續日本紀及雜記ニ至武帝壬午年九月庚辰日始て天皇御宇に則て

内宮遙拜所 此石ハ一ノ内宮及ビ別宮を拜し奉る者ナリ

土宮 元ノ方ニあり 系神三座 大土御祖神 宇賀御魂神 志田命 外宮

第一ノ別宮ニ坐す 崇徳天皇三年庚午年九月庚辰日始て天皇御宇に則て

地護宮 土宮ノ北ニあり 大宮三座 地護ノ宮ニ坐す 其神

月讀宮遙拜所 中宮ハ宮後野ニ坐す 月讀宮ハ宮後野ニ坐す

山神社 月讀ノ宮遙拜所 系神大山祇神ニ坐す 神祇記ニ云ク 祇ノ地神ノ

子ノ余も毛みかりしにて志す

下御社 此神ノ社ノ傍ニあり

外宮并ニ別宮 系神三座 級長津彦命 級長彦彦命 級長彦彦命

凡日新 凡日新ハ七月に月讀ノ神ノ長柄ノ木を流して古山を

此社ニ花を挿し奉る者ナリ 心を以て宮ニまう者ナリ

所名

千枝枝 凡宮ノ東 膳 菅大宮 司子枝と云人極らと云一と云伴す又百枝

對しての名ナリ 昔ハ此處ニ心保年中暴風雨ニて今ハ此處ニ

岩守守神ノ志ナリ 今も岩守守神ノ志ナリ 此ノ枝ノ志ナリ

高倉山 岩守守神ノ志ナリ 今も岩守守神ノ志ナリ 此ノ枝ノ志ナリ

若代及濁りもありし者ナリ 今も若代及濁りもありし者ナリ

石空本縁 曰日新高佐山者 是月本縁府路不在 十二箇石空

也 是巢居穴居の所の石空也 今云石空ノ理ナリ

高天原 岩守守神ノ志ナリ 今も岩守守神ノ志ナリ 此ノ枝ノ志ナリ

此ノ枝ノ志ナリ 今も岩守守神ノ志ナリ 此ノ枝ノ志ナリ

此ノ枝ノ志ナリ 今も岩守守神ノ志ナリ 此ノ枝ノ志ナリ

外宮御山
豊宮崎



豊宮崎の下の
文庫

御田植神事

御田の神事ハ又月夜日と云々
大物忌のまゝ良此田より
稲種をさうする其のゆゑ
非樂板人あつまく
秋祭をなと長谷より
に舟と舟を横又舟
興六府十府とハ
驛馬の山の上
ふれ山は入り
田長六人
保惟子
九
非





其二

群う一人金まの持瓜る

其河云持るるをけく河甲
 さんおとらふくまを河進人
 わきから 河田廟らのひたをま
 廟指入 なるの廟を二かぢ
 持るる抱鳥欄まじりも松老
 の人にくわ自移二持人まう
 され奉樂ふりうまをば瓜る
 推世を右の老人のおる持廟
 そち其樂と人う載と

又長官の里其すて

踏く仍うま
 持るる河のまをけく河甲
 さんおとらふくまを河進人
 わきから 河田廟らのひたをま
 廟指入 なるの廟を二かぢ
 持るる抱鳥欄まじりも松老
 の人にくわ自移二持人まう
 され奉樂ふりうまをば瓜る
 推世を右の老人のおる持廟
 そち其樂と人う載と



高神社講堂 祭神 建所名方命 宮社の名に社よりして不祭なるは此二社
西の並に坂をやりて園中へ之坂の下は坂より宮崎(も)知るは此坂をこせ坂若戸
坂(も)知るは其序某をいらく九百七十年斗系たり

豊宮崎 宮山(も)の西方(も)南(も)北(も)又(も)東(も)西(も)の(も)あり 又此(も)不(も)祭(も)神(も)河(も)内(も)も(も)神(も)小(も)河(も)丸
宮崎の大海原(も)も(も)其(も)り(も)引(も)遠(も)て(も)其(も)間(も)の(も)田(も)畑(も)も(も)細(も)流(も)お(も)ま(も)り(も)經(も)緯(も)も(も)よ(も)

その(も)く(も)名(も)付(も)く(も)茶(も)の(も)飯(も)か(も)岳(も)東(も)小(も)神(も)道(も)も(も)西(も)又(も)其(も)靈(も)と(も)して(も)又(も)詩(も)客(も)弄(も)遊(も)
宮崎文庫 祭神(も)の(も)祭(も)神(も) 慶安元年(も)に(も)宮(も)建(も)あり(も)其(も)の(も)外(も)宮(も)祠(も)官(も)名(も)の(も)学(も)校(も)也(も)

講習討論の寮也 東西(も)八(も)間(も)南(も)北(も)三(も)間(も)あり(も)南(も)面(も)少(も)く(も)九(も)又(も)海(も)原(も)も(も)右(も)も(も)金(も)山(も)を(も)
揚ぐ 授(も)千(も)部(も)に(も)及(も)べ(も)り(も) 慶安(も)の(も)とき(も)林(も)道(も)春(も)秋(も)傳(も)一(も)部(も)を(も)授(も)け(も)り(も)す(も)の(も)授(も)け(も)る(も)よ(も)の(も)

又此(も)國(も)素(も)性(も)の(も)人(も)と(も)も(も)其(も)器(も)を(も)そ(も)く(も)講(も)師(も)と(も)云(も)文(も)庫(も)人(も)教(も)授(も)け(も)り(も)た(も)
厚志(も)あ(も)れ(も)人(も)の(も)講(も)師(も)も(も)德(も)衆(も)も(も)如(も)き(も)り(も)林(も)道(も)春(も)收(も)春(も)秋(も)傳(も)一(も)部(も)之(も)時(も)題(も)

文庫書記之文あり長文ありをいらく瓜田(も)君(も)を(も)此(も)外(も)同(も)氏(も)春(も)秋(も)紀(も)元(も)永(も)田(も)君(も)教(も)
教亭(も)等(も)の(も)記(も)も(も)あり(も)又(も)外(も)の(も)額(も)二(も)宅(も)若(も)女(も)道(も)慶(も)の(も)名(も)内(も)の(も)額(も)弘(も)文(も)院(も)

林氏(も)等(も)い(も)く(も)共(も)豊(も)宮(も)崎(も)文(も)庫(も)の(も)五(も)字(も)也(も)床(も)の(も)間(も)も(も)大(も)神(も)宮(も)尊(も)号(も)後(も)
陽成院の御宸翰をく 先(も)年(も)室(も)敷(も)直(も)徳(も)具(も)原(も)篤(も)信(も)修(も)長(も)谷(も)重(も)遠(も)を(も)先(も)

屋上様 附言 大(も)坂(も)神(も)学(も)者(も)桂(も)本(も)坊(も)此(も)文(も)庫(も)に(も)講(も)習(も)せ(も)り(も)附(も)姓(も)素(も)の(も)日(も)記(も)と(も)宮(も)川(も)日(も)記(も)と(も)棟(も)梁(も)の(も)名(も)を(も)別(も)圖(も)の(も)數(も)
外宮撰社十六座の内之 大(も)國(も)の(も)撰(も)社(も)也(も)

伊加利社 大(も)國(も)玉(も)比(も)賣(も)社(も)の(も)南(も)に(も)あり(も) 儀式(も)帳(も)も(も)式(も)外(も)名(も)所(も)の(も)内(も)と(も)あり(も)

井谷池 掘(も)り(も)其(も)の(も)西(も)に(も)あり(も)井(も)受(も)又(も)其(も)北(も)に(も)あり(も)保(も)安(も)の(も)池(も)也(も)往(も)來(も)の(も)舟(も)を(も)使(も)ひ(も)て(も)靈(も)水(も)

龍林 林(も)底(も)を(も)源(も)ふ(も)河(も)内(も)の(も)社(も)も(も)舟(も)是(も)の(も)小(も)の(も)名(も)なり(も)西(も)に(も)あり(も)と(も)云(も)す(も)

豊宮崎 河(も)内(も)の(も)地(も)名(も)なり(も)傳(も)の(も)因(も)或(も)は(も)倉(も)海(も)系(も)も(も)り(も)西(も)に(も)あり(も)倉(も)山(も)も(も)一(も)部(も)を(も)岳(も)陽(も)崎(も)の(も)

神樂

依の社社のさく神をうく神樂と云ふ
 うさし神師の宅に神をと攝へ神樂
 役人をりりめて勤むは神樂儀の外
 習て知るまふは其式両宮に於て
 習えたるものなり終に俗拾遺に
 依りてそのものも其系ハ天の御
 入神まじりて久しき其状は是の
 神樂と云ふは其のまじりての
 神樂と云ふは其のまじりての
 神樂と云ふは其のまじりての
 神樂と云ふは其のまじりての



神樂中の神樂
 聖神の御座り
 神樂
 神樂



錦河内 卷修の宮傍のふもとにあり深瀬の川にありて水は清く流るるなり

河内 河内郡の宮傍の河内と云ふは板橋の河内とも稱せらるるなり

の系流記 河内郡の宮傍の河内と云ふは板橋の河内とも稱せらるるなり

舟足山 河内の舟推の本一を切小を造り此山にありて十真の跡を留るるあり

山末社 山末大山は此命 此社の名は俗に振り松と云ふ

鹿留山 鹿留山の南にありてその形 鹿留山の南にありてその形

宮傍の氏社 氏社村にありて 宮傍の氏社 氏社村にありて

教岳山 蓮臺寺の南にありて 教岳山 蓮臺寺の南にありて

世義寺 教王山宝金剛院 世義寺 教王山宝金剛院

一の居より少孤に下馬の橋を造り 一の居より少孤に下馬の橋を造り

はきき靈流あり せきせき小川あり せきせき靈流あり

所名

開基 志願寺の門前を以て 開基 志願寺の門前を以て

書寫 勅符あり 中真の書寫 勅符あり

瀧浪山 志願寺の北にあり 瀧浪山 志願寺の北にあり

白子園 志願寺の門前を以て 白子園 志願寺の門前を以て

永代山 虎ヶ尾山ありて尾上 永代山 虎ヶ尾山ありて尾上

園本里 此野の東に小田橋あり 園本里 此野の東に小田橋あり

一の居より内宮往來の便あり 一の居より内宮往來の便あり

所名

一の居より内宮往來の便あり 一の居より内宮往來の便あり



つみろ嶽
八束山
世系寺
小田の橋
おひら川

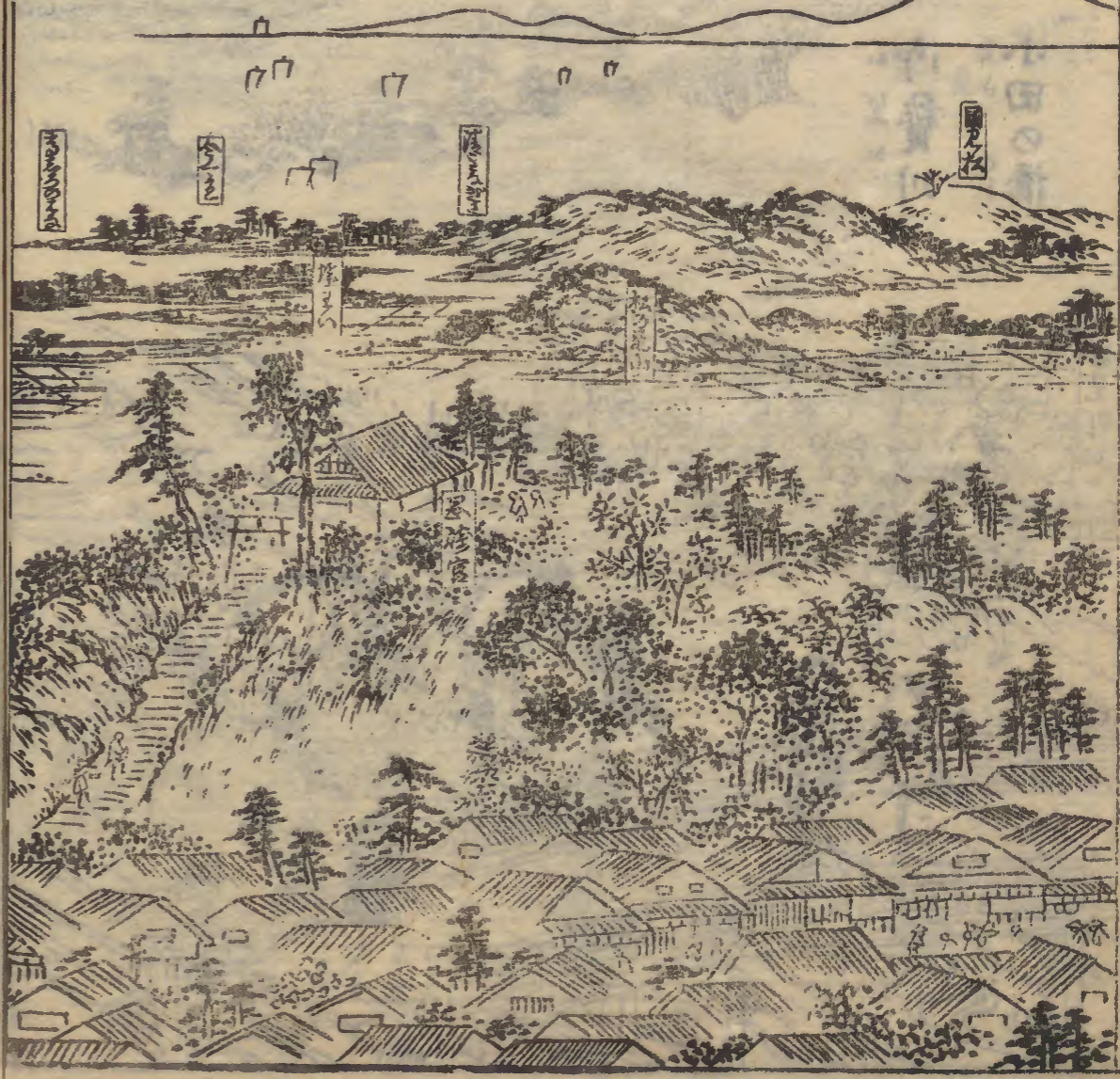


度々社
山本庄
宮山
野辺のついで
ついで

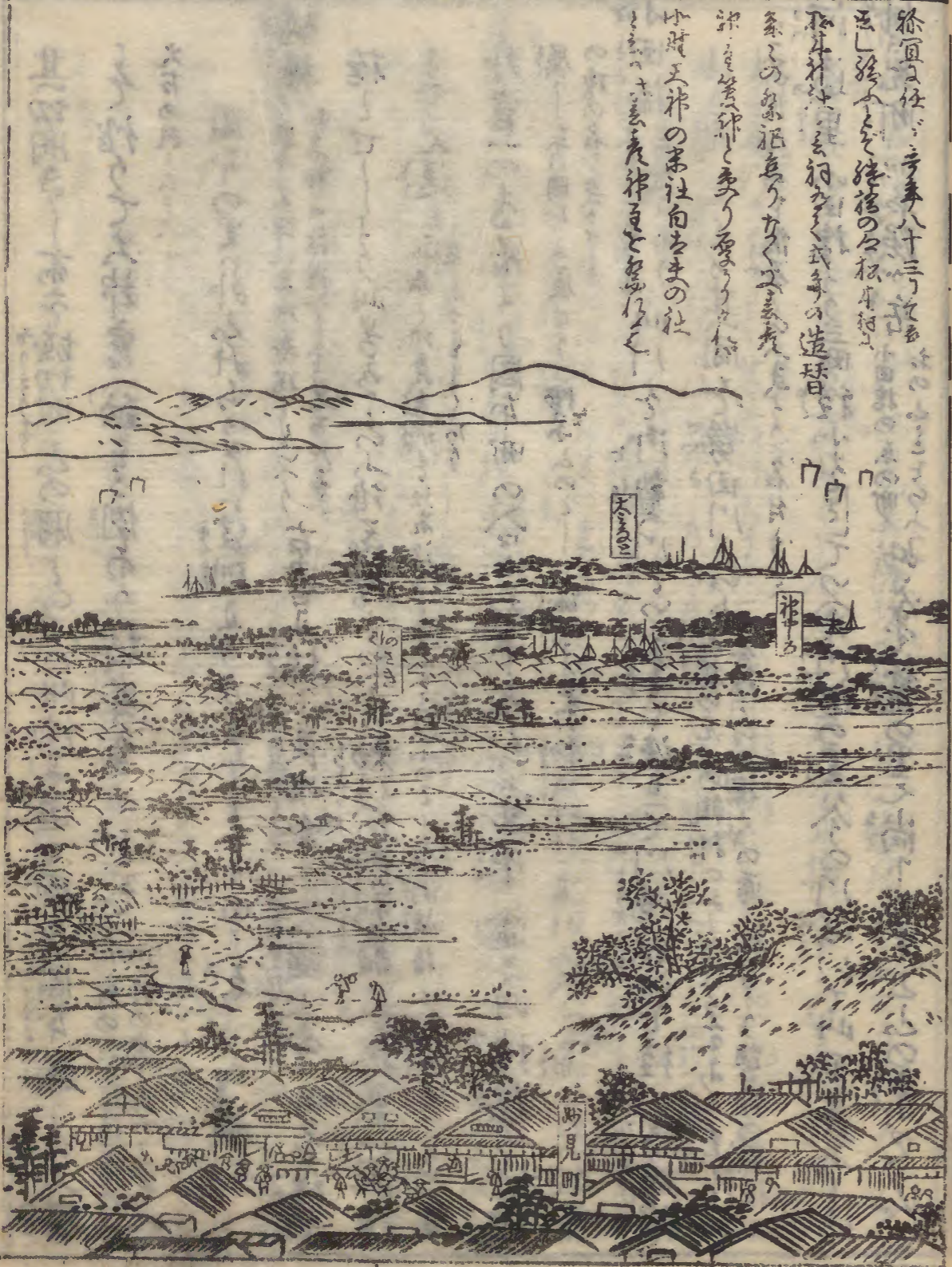
妙見山

附 向志夫の事

神宮左記曰貞觀二年
 大内人高主度命氏の
 御愛を此園傍の社に
 祈らるゝ二月十日十
 二日同胞二人の男子と
 産心宗雄を雄と号
 く内三年十一月十八日
 二人を産春海秋
 産と号く同日午十月
 十日日く二人の男子と産
 女作まきまきと云ふ六家と云
 中にもまきまき神の裔宗命の
 神を授けし系後連神と云
 其家今尚神宮に祀まざる
 従前延喜十八年二月廿日頁



徐直任... 孝年八十三...
 是し終ふを... 松本...
 松本... 式... 造替...
 系... 宗... 氏...
 神... 宗... 氏...
 小... 天... 神... 向... 志... 夫... の... 社...
 ...



其切開きし木を垣切町の腰と云ふ此地又造る櫛を園本櫛と云ふ
そ作りて大神宮(鞍馬)なる例あり故実ありとぞ
飛の宮と云ふは
飛の宮と云ふは

園本の里外に井らるる井は訓みたりさやりの名
成忠

継橋 旧名今不詳一名地蔵橋とも云ふ 古書に佐々良姫命と大國玉命弓を継で
和名抄に地蔵橋とありを古名也

橋とせしより此号もと云ふ地蔵橋と云ふは勅使の時叙爵家臣兼後此橋
まで見送る 継兼と地蔵教洲をたを送るとかきまは水のそを河橋橋と云ふ市村又水辺の
号ありともまかり

外宮一の倉居より園本町の入口を中ると云ふ其中途は此地蔵橋の西宮
屬一東は園本又属するの標ふふのこりと海切なる若く勅使此橋と通ひみよと云ふ非なるべ程兼
の標の名も愛が

小田橋 是れと妙見町 此川を河勢川と云ふ流れて河橋と云ふ城溪
流き渚 云々 其間を勢田川と云ふ 此橋のたりの欄干のたよりをありをそを
を標と云ふ探人の通ふ橋あり勢田の國俗女
子の月經をと假屋と云ふまより名付たり

河邊里 小田橋より三町程小をじて 河川辺の里は今の川橋にて此不又いあり
妙見町 旧名原が岳 小田橋の東の町は
おのこともと云ふ 妙見寺林森の里之尚下の尾上との系がらる

所名

園本宮 妙見町の南あり 妙見菩薩北辰尊皇の像安坐せり長三尺に皇次
秀經坐りて面容童女のおく在りの二指ををみ指さし右は御持指さし

素木御よりと云ふ其古朴なりと云ふ此移ををを信と云ふと云ふ似たり
昔は園本の宮と云ふ社地は社地は皇孫の胞衣を代り納めり一云と云ふ社地は胞衣と御
の不浄の毒をたれども二代の放多今もまの人の不浄をたれども社地は胞衣と御
一説は昔外宮より内宮へ河勢川の河上川よりそを名を瀬にせり一其教を求められし
引ては妙見の像成得たり即皇の重と妙見皇と稱せり其時より室は極して小児の像
此の標をひそくはたありと云ふ

尾部社 街よりありあり 系神未詳と云ふは倭姫の命又必せり 非本社
泉寺の西より

即命石隠しの地ゆへ小御成まき尾部の社より尾上との系がらる
我脊子かかれの園のふる 維子
はあそそ年の経抄に

隠山 けいひの山 園の末妙見町と尾上坂との間の山のふかりと云ふ右記は貞観年中妙見皇の像
を尾上陸より西小田園橋の宮に居りしと云ふは妙見皇の像なり

世記云雄略天皇廿三年の春二月倭姫命自尾上との系又退きて石隠まを
尾上との系がらるるのこを云ふ万葉持統天皇御勢より御勢のこを尾上との系がらるる
我せこうつらひらりんやんりの隠しは今日うとゆるん 一説は
よとて倭姫の方

隱池 尾部池より南の山よりこれより一の隠池と云ふ恒ちうと云ふいざし

あり俗不動池といふ早魁の附け不動池といふ事なるなり

尾上山 古名隠園と云ふ倭姫命薨去の地なるに之を系集及び代々の

撰集と詠歌多し寛文年中尾上社として倭姫命社再建あり

一が又破却今誰建と云ふ社存せり

者ありはげふ引物一罵辱しつて退放し或るは

場ありしは是も又地を引て其外山田市中に接し

を倭一住人ありは當代地を引て又地獄谷の首一寺ありて十石あり

常明寺 高日山法持 尚不年三の太寺と云ふ柔師して天台宗額後

陽成院御宸翰を奉事山門木魏と云ふ聖徳太子の建立と云ふ

○按るに地尾部陸のあり方南おほく尾上寺と云ふ又天後寺と云ふ

其後廢せしを再興しと云ふ天後寺と云ふ一は尾上寺と云ふ一は地獄谷の首一寺ありて十石あり

○非萱屋社 名明寺西 神祇奉源の尾上寺の花より

と云ふ祭礼の正月八日 又度之外宮の末社と云ふ人度會社と云ふ神樂男た勤之

神官馬のりて糸向あり其式と云ふ 又男女陰形の餅を奉

たり又俗より子なき者そを拾ひ男子女子を導くの事と云ふ

と云ふ僧が半と云ふ誦經あり始終神人の交對及將對を云ふ

て又鼓吹あり ○岩窟 是を倭姫命の石窟と云ふ

とも石窟の地と云ふ 又阿彌の庫裏の東竹林の内に

此辺の地名残れて阿彌と云ふ泉寺と云ふ名あり

頼政碑 名前の者の 眠地蔵 名前の事あり

石野目 日蓮法華のありて又宮より百日

全穀山光明寺 名明寺の北東面と云ふありて天台宗なり

聖武天皇建立と云ふ 阿基末詳 火災あり月波和尚

結城上野入る道忠墓 結城の首一寺ありて十石あり

流し月波和尚の塔 結城の首一寺ありて十石あり



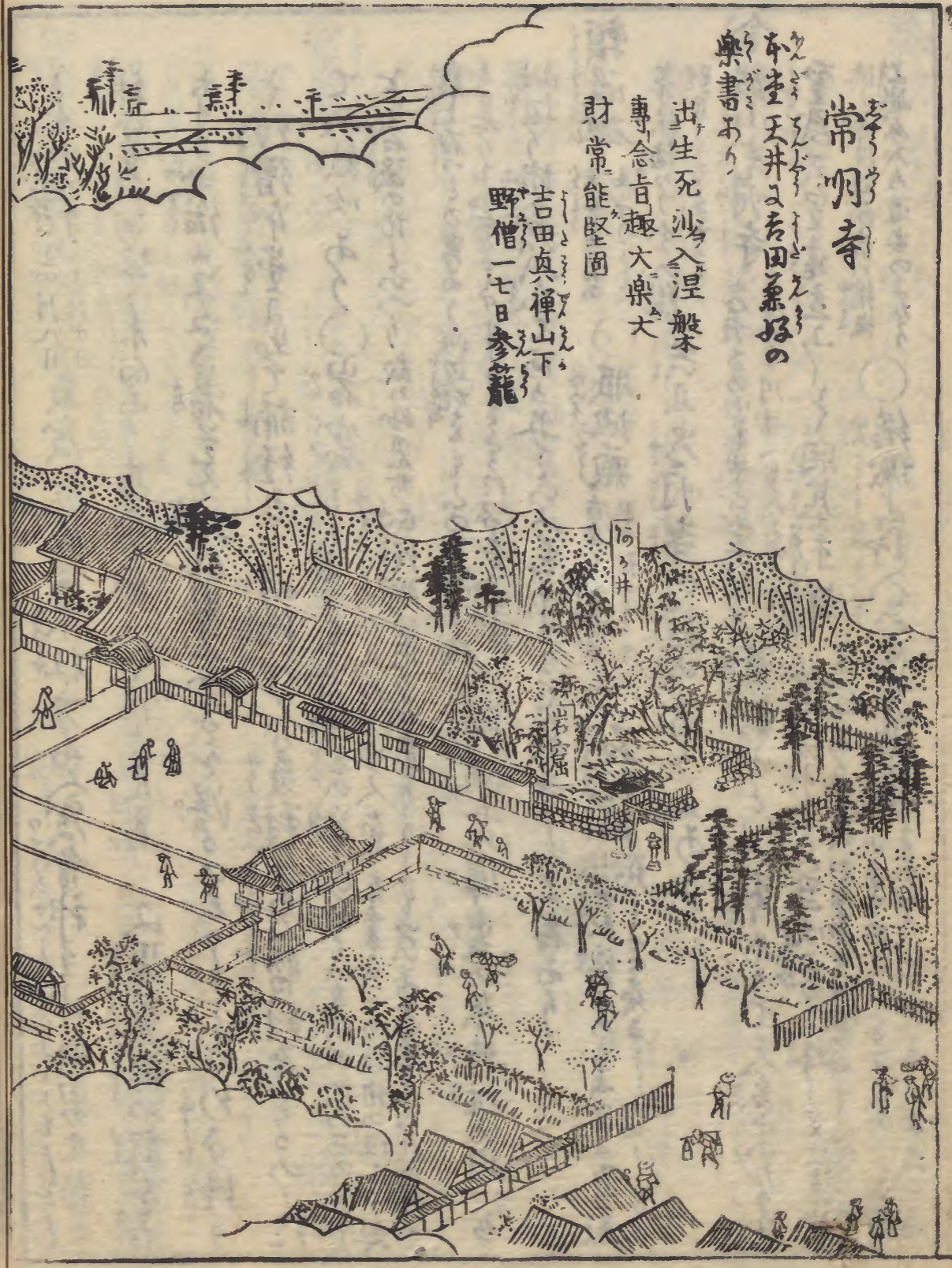
産徳記
 金毘羅権
 蘇和権

常明寺

本堂天井より天照大神の
 樂書あり

出生死沙入涅槃
 專念旨趣大樂大
 財常能堅固

吉田真禪山下
 野僧一七日參籠





山の間

両宮の所の心
 かるい間の心
 けり春今も津
 うり 若くか
 溜る物さる山
 ことさ節い元
 此不より出さる地
 火今とさうはさう
 三とてんひくのみゆ
 されとも流さる
 とせく何を
 新

古市

新の市場今法園
三日市に日市八日市
さといひて其日とさ
つく市をさせり名の
ゆりうと市に近廻
を郷の商人の集り
不かんが其市と
さへ不ぬ花女ありて
族の喜と盛を
是は漫和云と
よはト
相此右市も回の
この肉と茶糸
よついでと
回のふれ節と
さといひもの
ちたれり



物あつれかる節
かるあつれ節
うらうらうらて
川修多郎
洗ひ
是と修多郎
青段と祿
一都郵
華巻
うらひ物
あつれ節
此地の酒
香通ふ旅
元祿都風
賑ひあつれ節
子一の文衣其推
今も年々新地を
出せり



せんせつと安法津之庵 ○後白河院碑 二代の信濃河野親朝の

北島顕家卿碑 此卿は津國安部郡中我死を今に後あり信濃をより ○結城上野

入道自筆の軍中日記勅制軍法と云書あり 参考者平記のせらけり光

鐘 後深草帝の御宇常服實氏入寄附之毎日酉刻子刻

撞之 天正年中御宮御方より御座の古法らんげ山陸いべーと下を僧等

書中遂に披刃なく同種を候を御宮御方より自昔より中宮御座

乃た清一つをみく申朱めく去分仕二意の事自是より先去

○おやこるべとよあふん ○下借候と程をくす一守者也

十月八日

秀吉

朱印

上部城中ち友

東照山清雲院 妙見町と同のの 浄土宗下馬下系ぬ世に御装換寺と

經ヶ峯 尾都坂右 則上よ云世義寺三空院兩院の如法經と此所に納むる

石にまつまで皆あり若し希難一近世の地といふこと 橋平其傍小

間山 妙見町東の坂あり 尾都ののりいふに久より兩宮の間のふちらに間

右市場 尾都坂の 尾都ののりいふに久より兩宮の間のふちらに間

芝居の 尾都ののりいふに久より兩宮の間のふちらに間

大五輪 右市にあり石方に足地より頂を尖余波源なり

貝吹山 尾都ののりいふに久より兩宮の間のふちらに間



菩提山

板正律未流記云 胡德巡礼の志ありて
 何つたるか下りて河原の砂を
 かりて其砂を盆に注ぎて振らば
 其塵の垣わつた家居の如くぞ
 鄙よい似と香炉風薫 弘正寺
 新湯茶室烟幽 菩提山 禪坊
 かけ寺くを二戸してとらふ 下里

山家集別本 住持のよき菩提山上人月二別

本懐ヤ

みづのわたりて雲舟のよきをうけぬ
 月よふれゆく心つひのまじり

西行



かや堂

危りのせき芭蕉草り

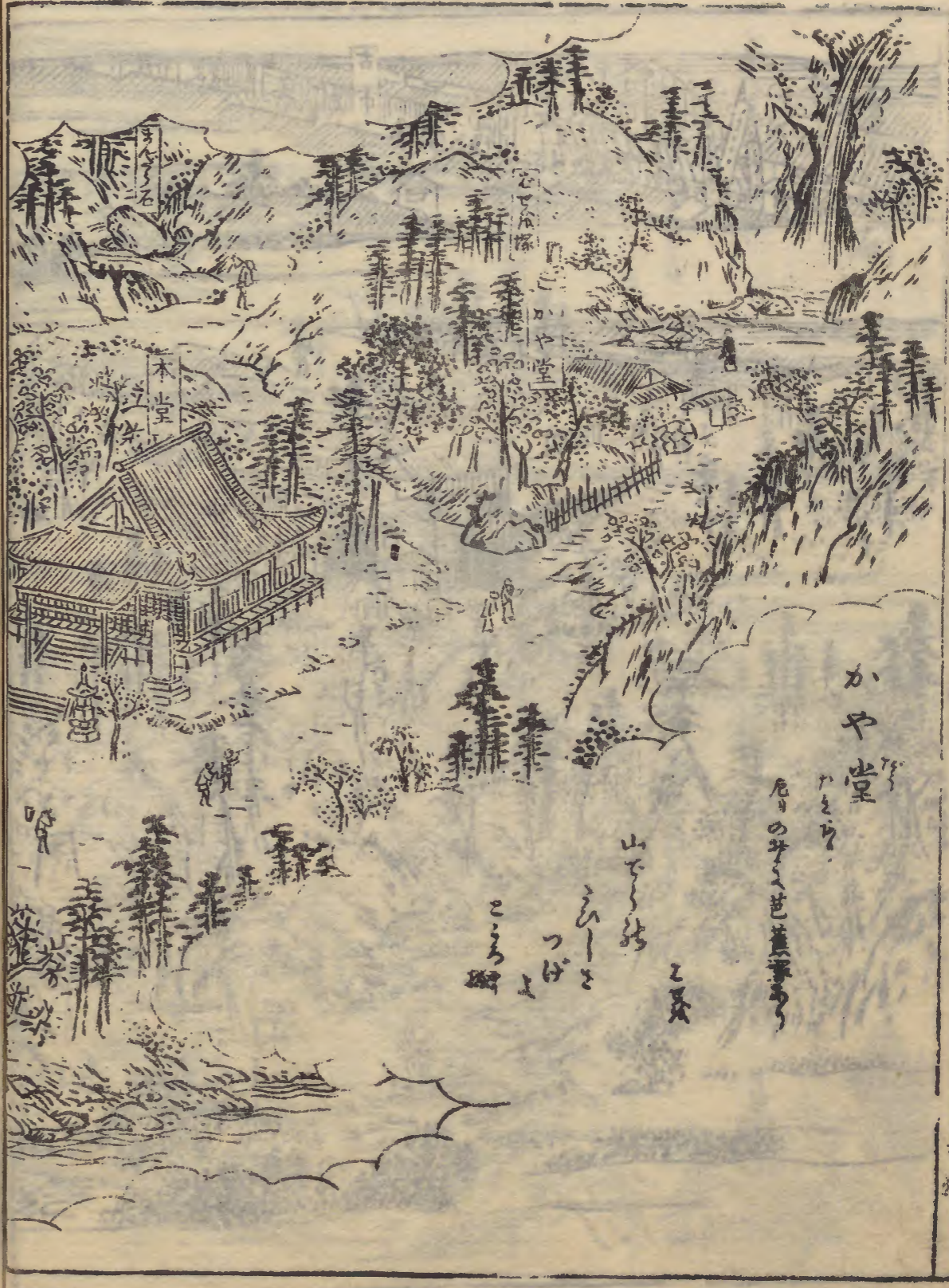
山でし結

ふしと

つげ

ころも

と英



中地藏 古多の次 間長等との内宮の外宮を二十町の其中間九町月

在り中の地蔵といふ堂系も長命水といふ

葛籠石 中地蔵の東方二町斗あり 高さ八尺余横二丈斗ありてはるけ形

に似たり今の道連を引て小社といひ此傍に觀音あり日本を大石の觀

音といふ云々を極多く嘆く騷客遊宴の地とす

王孫池 古市より智徳のるにささげを引てけりある信とゆふ 池又おれん池と云

名い中村皇女と森 ○赤子池 不傳未詳

月瀆伊勢諾両宮旧地 布能戸坂をり中村と云 仁壽二年八月廿二日洪水二

宮より流りて在今の中村の地と移せり近宮の年月いふも延嘉

式に載るる今の地 上右に又十餘川に思流と云ふ水の横瀬麻海村と云の瀬へおちて

善提山 其言ふ中村とあり 善提帝勅ありて天平十六年の草創用基

約基サ文治元年良仁上人これを中興と 西勢に集る善提上人より

かり兼元三年二月十九日入寂九十七

所名

本寺といふ阿弥陀佛 妙基 ○兩服立 不動果 徳守 天、天後宮 ○二王

門 二王弘法 古く大伽藍の地と云今堂大師堂と定塔經系といひ弘長

年中大史と燒失と其後宝曆十年 朝慈岳尊隆阿闍梨といふと再

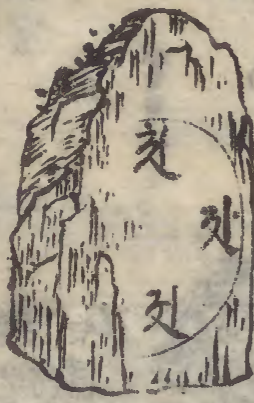
建して資子隆範に附屬と 續日本紀七卷 孫徳天皇の御神護

修務大社寺より造るとありけり寺 二年秋七月 佛を奉りて大六佛像と

阿弥陀院 良仁上人退隱の地と云孫元多の神地也 阿闍梨の名字あり ○弘板

名号 元壽三月十八日空海とあり 曼陀羅石 大日二月空海刻とあり

曼陀羅石 古瓦 此寸四方 壁の上下に缺破す 承安四年八月十



幅三尺長五尺計

皇女森 五十餘川の十中村といふ 日本紀雄略帝第二皇女携幡皇女

西の方より森をり也 四書寫之御所近邊 承安四年八月六日

曼陀羅石 古瓦 甚ま一両面は 推む其内は經と 細く刻とあり 國の如く年月 衰へたり

諸佛依般若波羅密多經 是大神咒是大明咒是無 般若波羅密多咒即說咒 誦波羅僧羯誦菩提 訶般若心經一卷

代高倉院の所 宇より御所と 書いたるは 宮の事なり

月讀宮
伊弉諾宮

松葉百首

實清朝臣

いとるる

徳如

ふれいふ
目

今

ふまはるる月日

九条内大臣

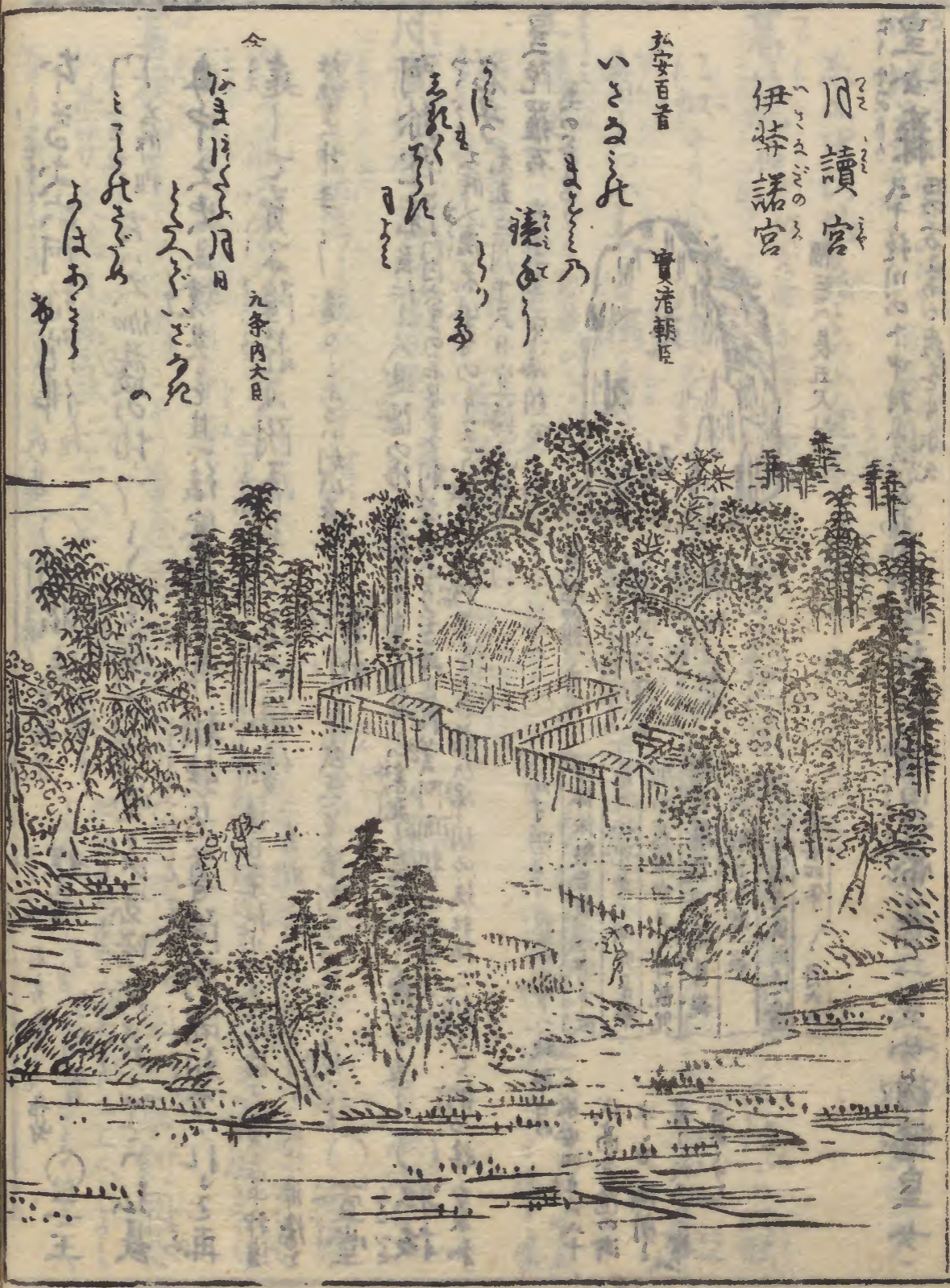
ふとるる

ふれいふ

ふはるる

ふれいふ

興玉の社おきたまのやしろの祭まつりは
たゞの世に傳つたへて居ゐる
日向ひなたの物ものは
多おほく此こゝ津つ傳つたの時とき
其その美み事ことを文ぶんとす



楠部村

大土河神社
國津河神社

沖常世田

八月吉日をもち大土河の沖にあり長官の
御用のたま政所をまこし又ありて出納
肉ひと山内人苗を極多そよりてお創り極
皆長官のまにゆくと三又年なる河田麻呂が
左右十人年を所素漁りたりたを死せむりゆ
よ管てとを被そくひるると其方おとえトウヒ
ええとよまえ とうとかなうそと長官のまにゆ
をにて田んぼをまのあり かくて諸般入
又酒をたまへこれを河津川ありと吸り
後水とけ合
後麻呂
やぶら



所名

敏官の立世... 廬城部... 臣國... 後天皇... 此に抄ひて...

月讀本林... 修持譜... 二月... 此二神...

興玉本... 月讀の宮... 後國... 興玉本...

地皇の神... 後國... 興玉本... 興玉本...

宇後姫... 御前... 興玉本... 興玉本...

楠部村... 旧名尾出... 興玉本... 興玉本...

國津河祖... 大土河祖... 興玉本... 興玉本...

御社二十... 庄の内... 興玉本... 興玉本...

御出供... 庄あり... 興玉本... 興玉本...

牛谷... 中の地... 興玉本... 興玉本...

浦田... 牛谷の... 興玉本... 興玉本...

降勢上人... 此の... 興玉本... 興玉本...

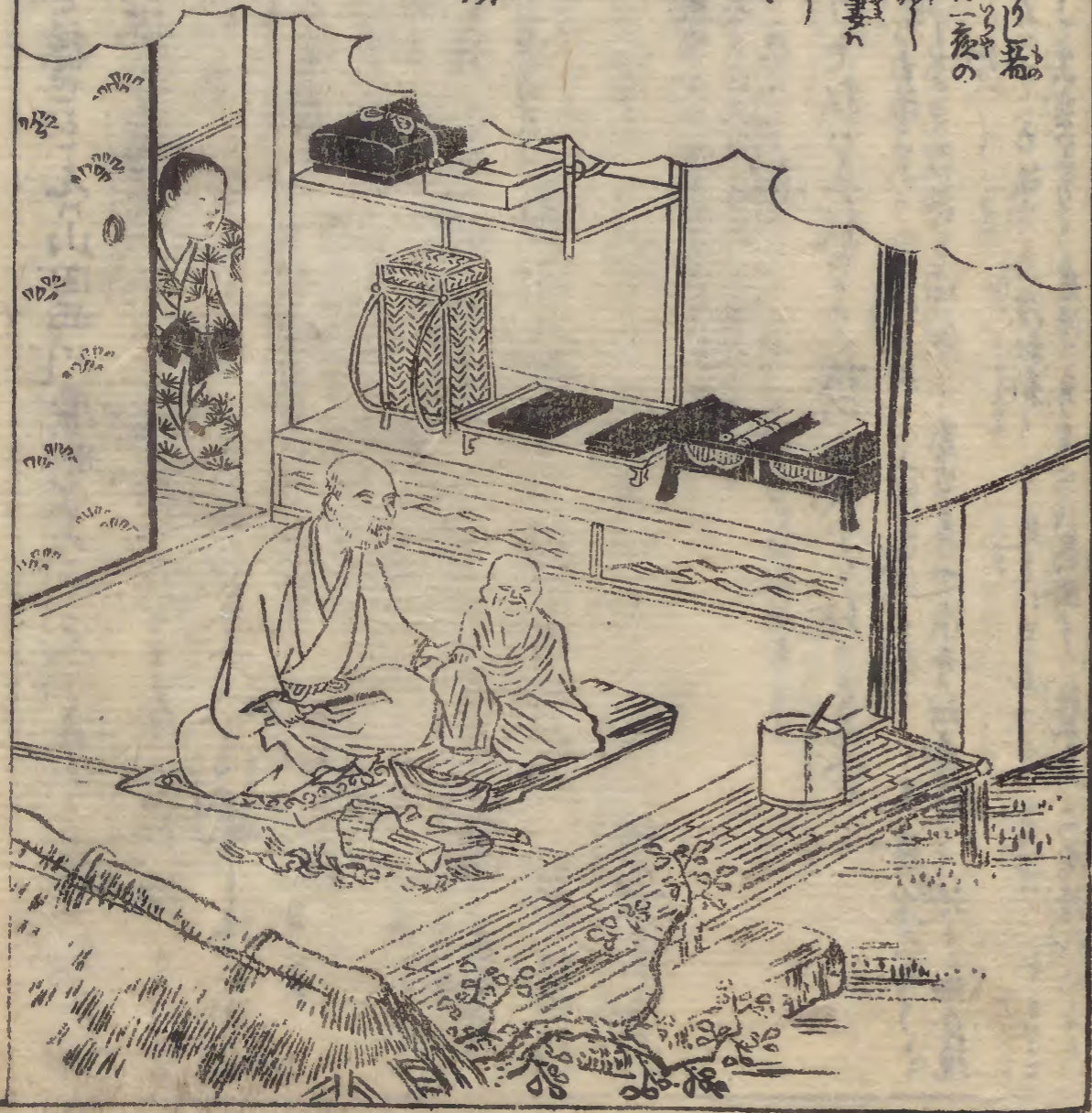
西行谷
神照寺

西行物語云西行
一衣因位後も
院の御時小面君
きりし一丸を討
憲徳とらひて
月射の人の衣の法
を教しと西に燈
間もなく大津宮
清で泳ぎまゝを
押二見の浦に身をい
とや二見の浦の月を
彼らと及 津治に
此も勝つたれは
東の方へ
の辺に建久九年三月十日
を浮くも花の月を
とれ



俗傳云西行の妻あり
得て此替に
うらに我像を造り
香粧して
はま又
徑果て今
神照寺
といひて後
副て

か
物
と
と
う
日
那



神ノ寺号を採せどえ山田西川原町ありて天正五年甲寅に採と地
の寺院と遠し佛堂禪社の数多く禪がなれども本寺何流とも
かく虫女佛妻を經て紫衣を著して官家の息女代信祇し終八用山
の大功名奉ふ不違思旨定 庫裏表裏殿廣くありて上殿
辨時永徳二十日者の事あり 長明

園田

中乃きんの丸の方より橋あり新橋といふ ○那自賣社園田の丸の方にありて
橋のなるこの西を川東町といふ

園田山神

神二座大水と所祖命沖玉御堂須藤比女命並祭る

西乃谷神照寺

建之の比園位一人將寓居ありし之又西乃

自他陀造り

西乃谷の扁家慶徳の志今い文人詩歌集會の

席とん

今の廣殿為九大絶去光廣の所寄附と
とより今い比血死住持と尚再上は元を

谷の戸み獨りぞ松のまにかりり我のとも友かたけうとをを

餓鬼谷真津院

南隣あり此物代文雄といふ僧密法よ妻といふ青黒の妻ありと
流しと密法を此寺に傳へしといふ

法樂會

園田の神の方には後宇多院勅札ありて建之に百部の今いなる下りかきと
三み佛ありて実言をまかり建之三年三月異國より龍來るの合源傳のより

不動堂

あり 明王院といふ言字にして本なる不動明王 庫裡宮殿に天正十
六年豊臣秀吉公

津長社

細村の西山の傍あり不祭一宿 ○大水社 津長社の南に不祭一宿大山抵所祖命則
の堂あり後てつとがけと俗傳と傳と

鼓岳

大橋の西より宮川又十段川二つの川に横とて

なやうとた舞いではいつ通るべきつとて岳をお保めつ 長明

けの世義我寺の古塔ありて又十段川の西より惣寺ありて惣寺の宮塔の南に建
宇治山田紀列の傍に三坪塚といふ所の古の官川の渡場は廿余町川上佐八村
ありて夫より南にうす内宮(付兼せ)之れは鼓岳と名づても其外外宮
のまへなる鼓岳といひ神ありしが乱世より民を押死せしと寛永十六年向の
おとく神ありしとの公命つとつとて後せり

神鼓山長明寺

鼓岳と林 本なる心親善勝長明僧く此不又位と

林傍文庫

鼓岳の北の傍 真言に奉りて造立ありて公より靴合を造りし志あり

靴合して造立せらる神の林傍の南の方丸といふ所に造り 元福三年
此不又位



書籍法家の寺附
 若手を納む候石碑
 あり孝徑一邨を構む
 東武源縣の書石在
 此石にて奥及の石を
 とす此れを述り

林山寺文庫

不老堂
 法泉舎
 大津社
 津長社



民部御経後

御堂
 川乃
 河
 乃
 御堂
 川乃
 河
 乃
 御堂
 川乃
 河
 乃



前中納言
 匡房

君が代
 久し
 く
 流
 川
 乃
 河
 乃

宇治橋
 五十鈴川
 御堂
 川乃
 河
 乃

鏡石

宇治橋の十八丁
其間名をまやか父

又妻

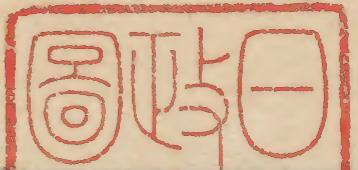
因るをみくくみくして一毛も
跡まふ其外身は遠近
よまう黙の群集異
たは険の流泉は深
源くまき岩として流瀑
とま其ハ自ら松柏
落まは猿の幽邃も
何んは祥昔推用よみて
妨射のふへいさか

此の此路をさう益
淵然淵西の流泉は
なれ名あり又宮路
橋より川流は六所
よりて右の山は



これ龍が穴
切末が穴ことと
城て志の
村邑あり
此辺即贊の
漁人あり





所名

橋姫社 宇治橋の守神 不承一座 宇治比賣命 皇紀日橋姫の社を八所

宇治橋 宇治の又あれはく宇治川に又十鈴川也 善通の橋より又のりて

常磐神皇曰 常磐神皇曰 常磐神皇曰

此橋は是より十余町下流の中村曾波河原にありて板橋の敷たり

三身 普賢院の軍義教公御奉宮の時今の如き大橋を架け

其年 宇治の河原にありて十町に又三身 普賢院の軍義教公御奉宮の時今の如き大橋を架け

五十鈴川 宇治川にありて一流の志乃部村の辺の谷にありて

一流 宇治川の志乃部村の辺の谷にありて

の海 宇治川の志乃部村の辺の谷にありて

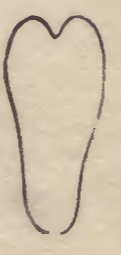
鏡石 宇治川の志乃部村の辺の谷にありて

清浄明白 誠の磨ける鏡の如きなり ありて鏡石社と云ふ

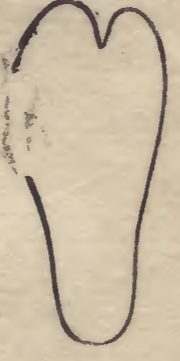
て二社あり 鏡石の邊にありて鏡石社と云ふ

なるなり 鏡石の邊にありて鏡石社と云ふ

川がれに其鏡石ありて三ツ石のゴバ石ありて 鏡石の邊にありて鏡石社と云ふ



二寸計大小さまざまあり



四寸計



伊勢参宮名所圖會卷之四終

